

第三篇 生物進化論と社会哲学

第六章

ここで当然の疑問が起こってこよう。社会主義の世において死刑による淘汰はなく、腕力による淘汰、経済上の競争による淘汰もなく、国家間、人種間の戦争による淘汰もない。それなのに、どうして生存競争によって淘汰される劣敗者というものが存在するのかと。

確かにその通りである。社会主義は、社会の一分子である個人の手にあらゆるものの進化の大権を掌握させ、同じく一分子である他人の権威を著しく踏みにじる死刑による淘汰のような社会の進化を阻害する生存競争をなくそうとするものである。高尚な理想の実現に向かって努力している過渡的な生物として、食物競争のために互いに打ったり、噛んだりする野蛮で残虐な生存競争をなくそうとするものである。元は同じ人類から分かれた大きな個体の一分子でありながら、国家を異にし、人種が同じでないというようなことから、殺戮し合う生存競争を世界連邦を実現させることで地球から一掃しようとするものである。けれど、今なお大きな単位の社会競争と完全に行われる小さな単位の個人競争はないではないか¹。

6—1 社会主義下での個人単位の生存競争

まず、個人単位の生存競争から説く。

こうした当然とも言うべき疑問が起こるのは、個体の思想において顕微鏡が発明される前と同じ思想をとるからである。つまり、個体と延長というものを理解しないためである。——社会主義時代の個人単位の生存競争は、この個体の延長のために行う生存競争——つまり雌雄競争²のことである。個体を横にして拡大した点から見れば、現在生存する全ての人類は一つの大きな個体であり、これを縦に延長した点から考えれば、原人からの十万年間の歴史は一つの大きな個体が長生きであることを伝える記録である。横の視点で見られた兄弟が各々別の個体ではないように、縦の視点で考えられた親と子も各々別の個体ではない³。一つは大きくなったもので、もう一つは長くなったものにすぎないからである。アメーバが無数に分裂して繁殖するように、親は自身の一部を分裂させ、これを子と名付けて抱いているだけなのである。一個のアメーバから分裂した無数のアメーバが、各々一個のアメーバであるのと同時に、空間を隔てた分子として最初のアメーバが大きくなっ

¹ 原文では「而も尚大なる単位の社会競争と完全に行はるる小単位の個人競争なからんや。」となっているが、意味がよくわからない。とりあえず本文のように訳したが、あまり自信がない。

² 雌雄競争とは、生殖をめぐる激しい競争のことである。

³ 縦の視点とは、直系血族のことで、横の視点というのは傍系血族のことである。

たものと見ることができるよう、一つの個体から分裂した親と子は各々一つの個体であるのと同時に、親の生命が長くなったものと考えることができよう。我々は、ワイスマン⁴の生殖細胞は不死であるという仮説が多く困難な非難の前に維持できなかつたことを知っているの、敢えて彼の説に頼らない。しかしこうした考え方は、単に親の細胞が子に伝わり、子の細胞が孫に伝わり、孫の細胞が曾孫に伝わり、そしてその細胞は伝えた親の肉体の一部であるというだけの事実による。つまり、「我々に永遠の生命がある」とは、この意味であつて、肉体そのものが永遠に死ぬことなく生きるということなのである。一個のアメーバが分裂し、分裂した元の部分が死のうとも、他の部分が生きて分裂を続け、繁殖していくなれば、元のアメーバは繁殖したアメーバのおかげで明らかに不死不滅でい続けるのである。それと同じく、分裂した親の古い部分が死に、新しい親の部分が子となって分裂し、孫となって分裂して繁殖していくなれば、元々の親は繁殖した子孫そのものとなって明らかに存在し、肉体面でも精神面でも不死不滅である。つまり、死んだと思われる親は、あたかも爪が落ち、髪が抜け、表皮がとれていくのと同じく、子という親の部分が生存して進化していくため、親自身が自身の不用になった部分を取り去って生きているのだ。——科学は一元論となり、宗教に帰っていく。唯心論⁵の要求である精神の不滅は、唯物論⁶の説明である物質の不死によって満たされている。物質と精神はもちろん一元的であり、人は肉体面でも精神面でも不死不滅の存在である。こう生存競争の単位を定めるには、個体の拡大というものを知るとともに、個体の延長というものを理解する必要があるのだ。

雌雄競争による生存競争とは、この個体の延長というものを理解して初めて理解できる。生物とは、生存の欲望があつて生存しているものである。生物は生存の欲望のために生存競争をしなければならない。つまり、生物である以上は生存競争を免れることはできないのだ。だから、生物は現在の生存のために生存競争をしているとともに、永遠の生存のためにさらに激しい生存競争をしなければならない。——つまり、食物競争と雌雄競争は生物界を通じた生存競争の二本柱なのである。そしてこの生殖の目的のためにする雌雄競争とは、アメーバのようにオスとメスの区別がなく、分裂によって生殖するものや、アブラムシのようにメス⁷だけで無数に生殖するものや、ヒルのように一匹でオスとメス両方の生殖器を持ち、オス、メスを問わず、とにかく他の一匹と接すればよいという生殖をするものにはないことである。競争は進化である。全ての進化は競争によって得たものである。だから、他の進化した高等の生物に至ると、種族対種族の生存競争である食物競争が激しくなるとともに、種族内における個々の生存競争である雌雄競争は、さらにいっそう激しさを加え、食物競争よりもさらにはるかに生物を進化させてきた生存競争である。これは

⁴ 原文では「ワイスマン」となっているが、「ワイスマン (ないしヴァイスマン)」と読むのが通常であるらしい。よって「ワイスマン」と読んでおく。ちなみに、ワイスマンはドイツの進化論者で遺伝学者。

⁵ 唯心論とは、世界の本体を精神的であるとする立場。仏教の華嚴経はこの考え方をとる。

⁶ 唯物論は、唯心論とは逆の立場。物質から離れた霊魂・精神・意識を認めない。マルクスは典型的な唯物論者で、彼の史観は「唯物史観」として名高い。

⁷ アブラムシは、夏に単為生殖で増殖し、秋にオス、メスの区別が生じる。厳密にいうと、オス、メスの区別ができてから卵を産むので、単為生殖だけで増殖するわけではない。

ダーウィンの混沌とした組織のない生物進化論においても事実として無数に羅列されているものであり、私は生存競争の中における食物競争と雌雄競争を左のように考える。——食物競争は種族対種族のもので、同種族間の個々が他種属である個々に対する競争は間接的で無意識的である。他方、雌雄競争は同種族個々のもので、他種族とは無関係に同種族の個々が競争者として直接的、意識的にする生存競争であると。

まさに「天地一切の美」と称されるあらゆる美のほとんど全てにおいて、この命の継続のためにする生存競争の結果ではないものはない。ある虫の仲間の美をなしている保護色などが、それを食物にしようとする他の鳥類に対する種族対種族の食物競争による進化であることは言うまでもない。ライオンの牙、ワシのクチバシ、牛の角、馬の足、皆それぞれに食物競争による進化であるが、直接的もしくは意識的に、個々対個々の生存競争であるという点において雌雄競争には全く及ばない。雪山の頂から待たれるウグイスの初鳴きは、メスを呼ぶ雌雄競争によって進化したものであり、わずかなさえずりを詩人の家の窓に落とし、雲に消えるホトトギスの恋の歌は、命の継続のために争う生存競争の淘汰によって生まれたものである。柔和で小さなハトの白い翼の舞も雌雄競争による進化であり、たくましい雄鶏が蹴爪⁸ととさかを用いて戦うのも、命の継続のために争う競争の淘汰によって生まれたものである。オシドリのおスの美⁹、クジャクの雄鳥の麗しさ、これらには一妻と多妻の違いがあるが、ともにメスの愛を集めるための雌雄競争による進化である。獣においてもそうである。ライオンのフサフサとした長いたてがみは、決して食物をとるためにあるのではない。百獣の王の威厳を示し、メスの愛を得るための雌雄競争による淘汰の結果生まれたものであり、食物をとる目的のためには不便を極める雄鹿の角も、雌雄競争のために争う激しい競争の進化によって生まれたものである。昆虫類の美色、美音に至っては、わずかな保護色を除き、全てこの雌雄競争による進化の結果生まれたものである。チョウと名付けられた装飾を極めた春の舞踏家がいなければ、新緑の春の野原も砂漠に等しいだろう。ひしひしと心に迫る悲しげな音を奏でるスズムシ、マツムシという秋の音楽家がいなければ、秋の夜に浮かぶ月も一塊の銅板にすぎない。まさに、彼ら恋愛のかわいらしい競争者のおかげで、春は恋に舞い、秋は恋に歌う。ただ動物だけではない。あの虫媒花¹⁰と名付けられた虫の仲間の媒介によっておしべとめしべを交配させる植物になると、恋の使い¹¹を招くために、いかに花の顔を飾って¹²待っていることか。桜の花が咲き乱れるのもこのためである。牡丹があでやかで美しいのもこのためである。春の草が上品である¹³のも、秋の花がしとやかであるのもこのため、まさしくあらゆる美しい花で雌雄競争に

⁸ 「蹴爪」とは、鶏などの脚のやや丈夫に後ろ向きに生えた鋭い突起のこと。闘争用の武器になる。

⁹ オシドリのオスは冬羽が美しく、翼にだいたい色の思い羽がある。

¹⁰ 意味は、本文にあるとおりである。

¹¹ 原文では「文使」となっているが。「文使」とは、手紙を届ける者のことで、特に情事に関する手紙を届ける者のことを指す。

¹² 実際には、虫にはあの花の鮮やかな色は見えていないと言われ、ミツや香りによって虫を誘っているとされている。

¹³ 原文では「藪」だが、読みがわからない。「藪」と同じだとすると、「藪たける」で「洗練されて上品なさま」という意味があるので、意味が通じる。よって、この字に読み替えて訳した。

伴う進化を経ていないものはない。それなのに、今の獣教徒は生物進化論を講じる際に、必ずあざけりと罵りのしぶきを詩人の上に飛ばす。「あの詩人という者は、天地の美を一生懸命歌うが、宇宙は彼らの考えるようなものではない。チョウが舞うのをスズメが狙い、スズメが狙うのをワシがうかがい、そのワシをまた獵夫が撃とうとする。天地の楽しさを歌う詩人らは愚かなものだ。」と。しかし実際は、詩人は天地の美を直覚し、我々はその直覚を科学的研究で確実なものにしている。宇宙の美は恋によって作られたのだ。恋によって作られた全てが宇宙の美なのだ。生物進化論において雌雄競争の占める地位を理解せず、むやみにダーウィンを説を反響させるばかりで、大なる天の摂理を付録のようにしか理解せず、持てあましている獣教徒が詩人を理解しないのは当然である。生物進化論を掲げて他人を好き放題軽蔑するのは出過ぎの極みである。我々は力を極めて断言するのである。直接的、意識的に同種族間において個々対個々とする生存競争は雌雄競争だけであり、しかも直接的、意識的に個々対個々で行うからこそ、最も生物進化の恩恵を受け、力があるものなのだ。そしてこの断言は、まさに今の生物進化論の組織そのものに対する組み替えを要求するものである。

6—2 現在の雌雄競争は妥当か

社会主義時代における個人単位の生存競争は、命を継続するためにする雌雄競争のことである。つまり、現在の生命を維持するための食物競争が個人間で行われたいため、雌雄競争は驚くほど盛んに行われ、驚くほどの速さで社会を進化させるだろう。——換言すれば、あらゆるものの進化の大権を特殊な個人に帰属させず、社会の全分子による自由競争に任せ、全分子が自由な恋愛の競争をする間に、真を得ず、善を持たず、美を持たない者を失恋者として淘汰するようになるだろうということである。自然は快樂と対照的なものであるため、苦痛を与える。今日社会主義の悪口を言う者は、社会主義は人生から苦痛を取り除こうとする空想であるというような矢をつがえているが、これは実は社会主義の効果を賞賛するにすぎないものであり、彼らは今日既に社会主義者のある者から唱えられている自由恋愛論¹⁴の叫び声に耳を傾ける必要がある。この自由恋愛論は、雌雄淘汰の法則を発動させる自由というものであり、この生存競争によって淘汰される失恋者は、社会主義のどうしようもできない者である。このようなことは、個人主義時代の独断的人道論で眺めれば、嘆かわしいことであるが、社会進化の原理は涙で阻めるものではない。人類は一生物種族である。一生物種族として人類の進化に努力している社会主義は、当然に生物進化論の全ての法則の外に漏れることはできず、社会進化論は生物進化論の巻末の一節である。だから、社会主義は第一の主張として、人は高尚な傾向を持った者であるが、生物である点において、まず生物として生存可能な物質的資料を得るための食物競争（食物競争の真の意義については後に説く。）があることを認識しなければならないと主張する。ま

¹⁴ 当時の社会主義者らは、恋愛なども社会主義の議論の対象にしていたようである。木下尚江も恋愛に関して論文を書いている。

た、人類社会は最も高い進化に真っ先に到達したものであるが、他の生物と同じく生物であるため、生物進化の重大な自然法則である雌雄競争によって社会を進化させなければならないと主張する。そして、その雌雄競争の生存競争は、あたかも食物競争と同じように、生物種族の階級を異にすることから内容を異にするので、虫類の食物競争が鳥類のものと異なり、鳥類の食物競争が獣のものと異なる。それと同じく、獣と生物種族の階級を異にしている人類の雌雄競争の内容は、「類神人」としての恋なのである。

しかしながら、「恋は満腹の後にするものである」。全ての生物種族を通じて、雌雄競争は食物競争に圧迫され、食物競争の優勝者から雌雄競争の優勝者を決定するという条件がつく。理想は、満足された現実の上に将来到達するであろうさらに高い現実である。雌雄競争は将来の命のために争うものであるため、優者、勝者を理想と見比べて求め、食物競争は現在の命のために戦うものであるため、優者、勝者を現実の状態に得て満足する。理想は現実の後に来る現実である。だから、他の種族に対して現実の生存を維持する以外にない生物種族においては、理想をその子孫である継続された命の中で実現させる雌雄競争はなく、先に例に引いたヒル、アブラムシなどの下等生物は、単に種族対種族の緩やかな生存競争にとどまる。そしてさらに、高等なる生物といえども、なおその種族を食物にしようとする種族及びその種族が食物にしようとする種族の間で行われる食物競争が困難であるため、現実の命を維持することだけに急である。そのため、雌雄競争によって得る子孫の継続された命に理想の実現を期待することも強烈ではない。あの肉食獣の雌雄競争における優勝者が、食物競争においても同時に優勝者であることが多いのはこれの著しい例であり、鶏が闘争に勝利を得て、多くの雌鶏を率いていることは多くの人が知る所である。

人類であってもこの例から漏れない。現在の命を維持するため、食物競争が理想を実現する命の継続のためにする雌雄競争を圧迫し、もしくはそのための条件となっているのは、歴史の初めから今日までを通じて事実である。村落単位で食物競争を行い、しかもそれが戦闘によって決せられていた漁業、狩猟、遊牧の時代から、封建的区画を単位として食物競争（つまり土地の争奪）を行い、しかもそれが武力によって決されていた中世史に至るまで、酋長もしくは国王、貴族が食物競争の優勝者としての武力で同時に雌雄競争の優勝者となっていた。今日、食物競争による土地の争奪という形で優劣を武力に訴えて決している国際間において、その優勝者である軍人階級が、食物競争の優勝者となっているために、同時に雌雄競争の優勝者になっているのと同じである。この意味において、今日自ら文明人と称している我々は、あたかもアイオワ州のスー族¹⁵が人の首を取って初めて頭上を羽毛で飾り、結婚を要求する資格を備えるというのと大して異ならない。そうではないのだ！ 今日文明人は野蛮な食物競争の方法を国際間だけにとどめ、国内の食物競争では個人主義の労働説を理想とするようになった。しかしながら先にしばしば説いたように、それも単に理想にとどまり、依然として武力時代の占有説が継承され、機械の発明によっ

¹⁵ スー族は北アメリカの先住民の部族の一つ。ダコタ族としても知られる。スー族では、男は戦いに勝たないと、結婚する資格がなかったのだろうか？

て純粋な経済的貴族国となっているため、雌雄競争は完全に食物競争の経済的優者に圧迫され（下層階級から売られて上層の妻や妾となるように）、また食物競争の経済的優者になることが雌雄競争のする条件になるようになった（財産の多寡が結婚の条件となっているようなものである）。この意味において、今日の文明人はあたかもチュラデルヒーゴ¹⁶の原住民が女子の父母に財産あるいは労働を払って妻を買うというのと全く差がない。理想よりも現実である。食物競争は雌雄競争に先立つ競争である¹⁷。個人主義の労働説は、娼婦が貞操を売ることを労働であると説いている。我々はこの尊敬すべき労働説を認め、決して男子が金銭によって娼婦を強姦しているとか、「巡娼」¹⁸と言うのは単に地位を入れ替えただけの輪姦であるなどとは言わない。これは、雌雄競争が食物競争に圧迫された最も著しい事実だからである。そしてあの財産の多さが結婚の条件となる上層階級に至っては、まさに食物競争の優者であることが雌雄競争をする条件となっていることを示す興味のある事実として認識する以外にない。彼ら売春的な令夫人は、お酒と肴が付いて一夜五十銭という下層階級の売春婦よりもずっと安く、丸まげ¹⁹付きで一生ただと言うにすぎない。

令夫人のある者は言うだろう。「旦那様などは尻に敷いておりますのよ。」と。これは、決して笑うべきことではなく、十分に主張された権利の声である。もちろん、こうした令夫人階級は、旦那様と称する者が国家のために行う政治的会合がどんな機密を持つかはわからないと言うが、「尻の下」という一言は今日の男子階級の大部分が等しく雌雄選択権の喪失者となっていることを宣告する侮辱ではないだろうか。我々は社会主義者である。しかしながら男子である。我々は女子階級に口を挟む越権行為をするよりも我々自身の悲惨な醜態を省みなければならない。遊女を売春婦だとし、貧困にあえぎながら夫の労働を助けている尊い主婦を見下して行く令夫人という丸まげ付き売春婦が、極めて軽蔑すべき存在であることは言うまでもないだろう。しかしながら街頭を馬車で駆け、道行く人を叱咤している男娼²⁰的政治家、学者はいかにおごりに満ちた微笑をたたえて行くことだろう。娘を売る親がいて、婿を買う親がいる。天下の女子がおしろいと絹の服で装飾を尽くし、えび茶色²¹をした袴を身につけ、女学校の卒業証書を得て教養という金箔を付ける目的は、ダイヤモンド入りの指輪の価格で自身を高く売ろうとするためである。それと同じく、今日男子の多くが丈の高い襟の服を着るのも、水おしろい²²を塗るのも、政治学、経済学を修めるのも、早稲田大学、帝国大学の肩書がなければならないと言うのも、とどのつまりは令嬢という者の持参金を多額にすることにあるのだ。我々はまさに問う——今日の男子で階

16 スー族が出てきたことからするとアメリカの地名のようだが、よくわからない。フィラデルフィアのことかもしれないが、原語からかけ離れすぎていること、確定できる証拠がないことから、そのままにしておく。

17 原文は「食物競争は雌雄競争に先だつの。」となっていて、文章が完結していない。著作集にも「ママ」と注記されている。これまでの議論からすると、「競争なり」などと続くべきだと思う。よって、それを前提に訳した。

18 何と訳してよいかわからない。あちこちの男に売春行為をしている娼婦のことなのだろうか？

19 江戸時代から明治期における嫁入りした女性の髪のかき方。楕円形でやや平たいまげをつけたものらしい。

20 「男娼」とは、男色を売ること。

21 えび茶色は、黒みを帯びた赤茶色のこと。

22 「水おしろい」とは、液状のおしろいのこと。

級の虚飾を一切剥奪した裸体の女子を両手に抱いて、「俺は君の美と向かい合って、二世を作るために契りを交わす。」と広言できる者は果たして何人いるだろうか。女子は消極的で、男子は積極的である。故に、下層階級が生活のために消極的に犯罪者となり、上層階級が高尚な生活のために積極的に犯罪者となる。それと同じく、女子の売春は令夫人階級を除き、多くは生活のためにする消極的なものであり、男子は高尚な生活のために積極的に売春をする。そうではない！ 我々が前篇で少し述べたように、経済上独立していない者は政治上も道徳上も自由がない。かつて男女が同権を持てなかった時代には、女子は財産権の主体となることができず、男子が好きのように贈与できた所有物であったから、今日権利を抱いて実質的な財産のない男子階級が上層階級の女子のために尻の下で抑圧を受けるのも、実に科学的法則であると言う他ない。権利を主張できない者は奴隷である。それならば、我々は無数の売春奴隷である女子を認めるとともに、恋愛の権利を剥奪された全ての政治家、学者を人格のある自由民であると弁護することはできない（むしろ奴隷なのである——奴隷の意志が国家の意志であるとされ、我々はその下で呼吸している）。そして奴隷よりも自由民のほうが光栄であるならば、俳優を買う令夫人と男を尻に敷く権利を主張する令嬢は、彼女らの奉じる男色奴隷よりもはるかに光栄であることは、遠いローマ法の時代から認められた権利である。上官より与えられた妻に頭を下げ、昨夜の外泊を弁解している政治家や、妾の家に行きたいのを我慢し、あたかも情郎²³のある遊女が旦那の勤めを果たしている²⁴ように、成り上がり者の実業家よりみこしを担いでいるひどく醜い令夫人の機嫌を取っている学者よりも²⁵、福原の銅像で後世に名を残している伊藤博文氏、お鯉という者のことで有名な桂太郎氏などは、この厳粛な権利を極度まで主張した古代アテネに見られる自由民である²⁶。まさに、自由民と奴隷は経済的基礎によって分かれる。伊藤氏、桂氏などが女子をもてあそぶ権利——そう、我々は権利と言う——があるのは、あたかも資本家階級の女子が堂々と待合茶屋²⁷に出入し、それによって我々男子階級の者を快楽の犠牲として取り扱う完全な自由があるのと同じである。遊女を買って妻にすることは、少しも不道徳ではない。男子自身を買われて貞操をすら売っている様は軽蔑すべき限りの罪悪である。娘を売る親がいて、婿を買う親がいる。親に売られた女子は遊女となり、親に買われた男子は政治家、学者となる。男女同権論が必要で意義があった時代は、個人主義の革命による私有財産制の確立とともに過ぎ去った。それなのに、今や経済的貴族国の世となって、社会の大多数は権利の基礎となる財産がないので、令夫人と妾を買える男子と政治家、学者と俳優を買える女子に恋愛の権利は与えられ、他の階級の女子と男子はかつての

23 「情夫」と同じような意味でとればよいのだろう。

24 「旦那の勤め」は、主人に仕えるという意味であろう。

25 ここの「よりも」は必要なのかかわからない。これがかえって文章をわかりにくくしている気がする。

26 伊藤博文は、初代兵庫県知事を務めたため、日清戦争による功績を称えて銅像が建てられたという。「お鯉」というのは、桂太郎のお気に入りだった芸者。

27 原文では「待合」である。「待合」とは待合茶屋の略である。待ち合わせのために席を貸すことを業とした茶屋を「待合茶屋」といい、今は芸者を呼んで遊興する茶屋のこと。現代的に言えば、ホストクラブで遊興することを想像すれば、よいのだろう。

女子のように完全に奴隷となっている。男子のみが経済的独立を保っていた時代において、無権利の奴隷であった女子が悲惨だったように、悲惨なものよ。経済的独立を失った男子は今や上層階級の女子にもてあそばされる奴隷となっている。これではただの貧富同権論と言え、意義のなくなった男女同権論を今日において唱えるのは、直訳的反響²⁸も甚だしいのである。

まさにこの通りである。今日雌雄競争の法則を選択する権利は、男子にもなく、女子にもない。明らかにするならば、命の継続によって実現する理想に対する愛ではなく、輝かしい物質が流通する所、蓄積する所に従い、雌雄競争の法則の中心点が移動しているのである。つまり、いわゆる男女の縁というものは、今や出雲の神々の世論に基づく共和的合議制で決めるのではなく、専制的な独裁を敷いた福神が結びの神となって決めている。——「福神」の像は婚礼の床に置かなければならない。社会主義は社会進化の理想のためにこの像を駆逐しようとして、自由恋愛論を唱えるようになった。アメーバなどの無性生殖、アブラムシなどの単為生殖²⁹からオスとメスの両性に分かれ、競争し合うようになった高等動物は、ほとんどこの競争によってのみ高等な段階に進化したのであり、まさに進化の法則の特別な恵みを受けるのである。理想の実現は雌雄競争による。生物は、この雌雄競争のために異性の中から、最も善を持ち、最も美を持つ者を選択して得ようと望む。そしてその望みを達するために、同性中で自己が最も善を持ち、最も美しいようにして他の競争者に打ち勝とうとする努力が生まれる。その努力のために、異性は各々自己をより善にし、より美しくして、生れた子である新しい自己を遺伝と出生後の教育によって、より善を持った自己にし、より美しい自己にする。まさに、宇宙はこの雌雄競争に従って桜の花を咲かせ、牡丹を咲かせ、チョウを舞わせ、秋にコオロギを鳴かせ、鳥をさえずらせ、理解できない絶対的理想の実現に努力しているかのようである。「類神人」はこの理想のある部分を実現する任務を帯びて——つまり、人類としての進化の程度で理解できただけの相対的理想に向かって進化しているのだ。そしてその進化において最も先頭に立つものだから、他の高等生物が与えられていない進化の法則の特別な恵みを最も多く受ける。すなわち、他の動物ではオスがメスに比べて非常に多いのに反して、人類は男女³⁰がほとんど同数だということである。だから、他の生物において進化（食物競争による進化を除き）したのは、オスのみであるのに反し、人類は男子の他に女子も進化しており、その美は特に著しい。動物の多くは——あたかも一羽のメスのチョウに対して百匹のオスのチョウが競争する割合であると言うほど——オスとメスの数が著しく相違し、ほとんど同数であるものであっても、一夫が多くの妻を有する³¹関係から、メスはオスのように競争し合わなくても自由

²⁸ 要するに、海外の学説をそのまま日本に持ち込んでいるだけだということである。

²⁹ 原文は「単性生殖」である。単為生殖でも単性生殖でも同じ意味であるが、今は単為生殖のほうが一般的なので、そう改めた。

³⁰ 北は人類についてもかまうことなく「雌雄」をあてているが、オス、メスに直すと、露骨な印象を受けるので、男子、女子（ないし男女）にした。

³¹ 後半とのつながりがわからない。一夫多妻であるならば、メスは競争にさらされるのではないかと思われる。一妻多夫でないか説明がつかない。釈然としないが、そのままにしておく。

に多数のオスの中から相手を選択することができる。また、産卵の任務、美しい色や美しい鳴き声などは他の動物の注意を引きやすいため危険であるという食物競争のため、オスの進化と並行して進化することができず、メスは全てにおいて著しい格差がある下級の状態にとどまる。こうして彼らの中のメスが、雌雄競争の法則の外に立って傍観者となり、受動的な態度をとっているのは、つまりは進化の法則の恩恵から排斥されたからであり、進化の法則の継子だからである。それなのに、進化の先頭に立っている人類に至っては、男女がことごとく同数であるので、ともにこの慈母の懐に入り、ともに慈母に抱えられて駆けていく特別な寵児なのだ。つまり、男女が同数ということは、女は女の競争によって色っぽい笑い方と優美さを進化させ、男は男の競争によって威厳と知識を進化させたのである。それなのに、今やどんな状態であることか。愛のおかげでほころぶ色っぽい笑みの中には経済的な要求がこもっており、優美な肩に重荷を負担させる。老嬢^{オールド・ミス}³²のしわの寄った額とメガネ³³とは決して女子の美を現したのではなく、鉄のようになった腕の骨とうすのような尻をした女子は、ソマリア³⁴の原住民を除いては、いかなる野蛮人に見せても醜いと言われるだろう。いかにシルクハットをかぶっていても、頭がい骨の中に平坦な一塊の物質以外に持っていない寄生虫属の増加は、決して「男子の進化であり、知識が発達した者」と言うことはできない。同じ社会の分子でありながら、経済的君主、貴族の前に土下座して忠順な奴隷的服従を強いられている政治家、学者は、いかにひげをいかめしくして馬車で身を飾っても、勲章を身につけても、大きな礼服を着ようとも、大臣となろうとも、決して進化した男子の威厳を持っているとは言えない。我々は、少しも今日の食物競争が単純な個人単位によるものとは言わない。実は、継続された命である子孫が食物競争の劣敗者でないようにしようとする時からの家庭単位のものであると言おう。つまり、食物競争と言おうが、雌雄競争と言おうが、一方は現在の我を維持し、他方は継続された命の我を維持する努力である点において、生命維持の物質的資料を得る経済的競争であることは言うまでもない。つまり今日の雌雄競争は、男女各々が自己をより善にし、より美しくして継続された命である子孫を進化させるというよりも、単に継続された命である子孫がその命を維持すればよいとして、各々の理想とする男もしくは女を選択することを第二に置く。それ故に、その子孫は自己よりも進化することができず、理想の実現である子孫は単に現実の継承者となるにすぎないのだ。いや、理想の男とか、理想の女とかいうのは、今日完全に経済的優者となっているのである。つまり、理想の内容は輝かしい物質で満たされている。天下の男と女は、黄金を持っていることそのことによって、天下の女と男から理想の恋人として慕われるのである。社会の進化に一つも不合理なことはない。人類種族が種族の維持、進化のために腕力に訴えて生存競争をしていた初期においては、腕力の優れた者が社会の維持、進化に最も利益をもたらしたので、同時に雌雄競争の優勝者とな

³² 和製英語で、「未婚のまま婚期を過ぎた女性」のこと。

³³ 原文では「近眼鏡」となっているが、現在では通常メガネと言えば、近眼用のことを言うので、「メガネ」とした。

³⁴ 原文では、「ツマル」となっている。『北一輝思想集成』では、「ソマル」の誤りと見ており、「ソマル」というのは「ソマリア」のことであると見ている。本文では、これに従う。

った。その時代の女子は最もたくましくて、巧み³⁵に戦う者を理想として恋し、その理想の男子がまたその当時における理想の女を選択したので、社会の中において最も理想に近い男女の結合が得られた。その子孫が社会の中における最も理想的な男女の結合による遺伝を受け、たくましく巧みに戦う者となり、それによって社会の理想が実現されて進んできた。そして今日は、腕力による経済戦争はなされず、労働もしくは知識によって経済戦争が行われているのだ。だから、腕力で他の経済物を略奪する者は刑事責任を問われるとともに、離婚請求の理由となるほど雌雄競争の敗者になり、その理想の内容は全く一変し、労働もしくは知識で経済的優者となった者を恋愛の理想とされるようになった。社会の進化とは経済的進化である。だから、労働もしくは知識で経済的優者となった者を雌雄競争の理想としていることは、怠惰もしくは愚かで鈍い分子を淘汰し、最もよく労働し、最も多く知識がある者が子孫を得られ、その子孫が社会の中における最も理想的な知識などの遺伝を受け、最もよく労働し、最も多く知識がある者になる。それによって社会の理想を実現し、社会の経済的進化をもたらして進んできた。——しかしながら誤解してはいけない。社会の進化は純粋な段階で区画されるものではない。今日の労働と知識で行う経済的優者は、なお腕力に訴えた生存競争時代の思想を継承し、労働と知識は全く経済的資料である他種族の上に向かわず、同族間——つまり我々同胞間——の闘争に用いられているのである。つまり、第一篇の『社会主義の経済的正義』において述べた経済的戦国時代というものはこれであって、上層階級の用いる知識と下層階級の搾り取られる労働は、全く他のそれらの知識と労働を打ち消そうとする³⁶ためにすぎないのだ。この残虐で醜悪な経済的戦国時代においては、個人を維持する生存競争である食物競争の優勝者が残虐で醜悪な者であるように、子孫が進化する生存競争である雌雄競争の優勝者もまた実に残虐で醜悪な者にならざるを得ない。闘争に勝った闘鶏が数十羽のめんどりを率いるように、幸運な黄金大名階級の勝利者は、一夫一婦論者をにらみつけて、無数のめんどりを妾の家で養っているではないか。ホトトギスが血のために鳴くような失恋を歌う詩人がいようとも、鳥類と競争の内容を異にした人類のメスは、羽毛を黄金で装飾するために恋愛神聖論者を嘲笑し、老いたヒヒの前に群をなして集まるではないか。ボルネオの未開人³⁷が人の首を持ち帰って結婚の資格を示すように、同胞の血に塗られて輝くダイヤモンドの指輪を贈らなければ婚姻の資格が欠けていると感じるのではないか。野蛮な村落の婦女が最もどう猛で残忍な者を選んで身を任せるのと異なるところがなく、蒸気と電気を持つ野蛮な村落は黄金戦争の虐殺の中で最もどう猛かつ残忍な働きをした者だけが婦女を得るのだ。まさに、黄金のない者は家庭を作ることができず、作られた家庭も破壊される。家庭は、まさに雌雄競争によって得た理想の男女が遺伝と教育によって子女に理想を実現させようとする、社会進化において唯一の聖なる場である。それなのに、依然として今日のような経済的戦国を

³⁵ 原文では「克く」となっているが、「よく」と読む。「うまく」の意味である。

³⁶ 意味がわかりにくい。上層階級の知識は労働を打ち消し、下層階級の労働は知識を打ち消すということか。

³⁷ 先ほどは「スー族」が挙げられていたが、ボルネオ島の原住民も同じだったのだろうか？

維持して（もちろん維持してはいけないのだが）、こうした雌雄競争が数代にわたって行われると考えてみよ。人類は果たしていかなる進行方向に変わっていくことだろうか。婦人の色っぽい笑いと優美さは、男性化した学問と男子的労働によって維持されるものではなく、奴隸的服従の経済的武士、農奴と寄生虫の階級³⁸によって男子の威厳と知識は進化するものではない。高尚な現実（つまり理想）のためには、ありふれた現実が犠牲とされることは高等生物の全てにおいて存在する。あの虫類の美しい色、美しい鳴き声が対敵である鳥類の注意を非常に引き、個々の虫類としての維持、生存には極めて不適であるにもかかわらず、なおオスだけははるかにメスに優る多数で多くの犠牲を出し、それによって音楽の美しさと舞踏用の晴れ着を進化させるのに余念がない様を見よ。生物はただ種族の維持をすればよいとするものではない。さらに進化した種族となるために雌雄競争をし、雌雄競争の進化のために無数の犠牲を食物競争の中から出しても平然としているのだ。人類は、種族対種族の食物競争においては他の全ての生物種族の上に最も強い優勝者として君臨しているので（未だ微生物のような種族には完全に打ち勝てない³⁹のだが）、雌雄競争をする際、他の生物種族のように食物競争によって妨害される心配ははるかに少ない。だから、あの虫類のメスが他の種族の食物になることを恐れる食物競争のせいで、オスのように雌雄競争をすることができず、進化に遅れをとったようにはならない。女子は男子と同数であるから、男子のそれと同じく、女子間の雌雄競争によってしっかりとした速い速度で進化しているのである。男女を同数で産み落とし、人類にだけ偏った恵みを示している進化の法則は、雌雄競争の選択権を男女全ての手から奪い、無知で冷血な「福神」の絶対無限である淘汰権の下に置くために偏っているのではないか。原住民の村落においても命を賭けた恋路はあり⁴⁰、今日の経済的戦国時代においてもなお知識が深く、道徳心が高く、容姿の美しい男女が恋愛の理想とされていることは、まさに社会の全分子である男女の全てが子孫の代に社会進化の理想を実現しようとする要求であり、ここに社会主義の自由恋愛論が意義を持つてくるのだ。

6—3 社会主義の自由恋愛論

だから、社会主義の自由恋愛論が現実のものとして現れる世は、食物競争が今日のように、個人、家庭、経済団体もしくは⁴¹国家を単位とし、同種族が競争の相手になることがなくなる——つまり、経済面において社会主義が実現され、人類を単位として他種族を相手にする食物競争に入った時でなければならない。自由恋愛論が旧思想を抱いた親の圧迫を排除するという意味において、つまり自己が新しい自己の利益のために自己の古い一部か

³⁸ 「寄生虫の階級」とは、資本家階級のことである。

³⁹ 抗生物質ができてからは部分的に勝てるようになったが、近年は耐性菌に悩まされているから、これは今でも十分に成り立つ。

⁴⁰ 原文では「土人部落においても命を賭した恋路はあり」となっている。「命を賭した…」という表現がよくわからない。本文の訳は応急処置のような訳なので、あまり適切とは言えないかもしれない。

⁴¹ 原文では「若しくは」となっているが、明らかに誤りなので、修正した。

ら脱却しようとする要求として唱えられることも、もちろん大いに意義がある。つまりこれは、社会の古い分子と新しい分子の衝突であり、社会は新分子が旧分子と入れ替わることによって（つまり旧分子自身が死滅することによって、もしくは新分子によって地位を奪われることを通じて）進化するものだからである。しかしながら、人は初めから自由なのではない。自由な状態を得るのは人の自由を認識する社会の良心があるためで、その範囲内において自由なのであると前編で説明した。それと同じく、恋愛の自由といえども父母の良心の範囲外に出て、先天的に自由であるとは言えない。父母によって作られた良心に満足しなくなるまで子女の良心が進化した場合には、進化した良心に従って行動することができるということである。だから、子女が父母の意志の下にあって、良心を作られている最中には、父母は自己の良心で恋愛を禁圧する権力を持っている。子女が自己の良心で父母の良心を排除するに値すると認識しないうちは恋愛の自由はない。社会主義の自由恋愛論はこうしたことの他に当面の意義を持つ。単に父母の旧思想を排除するという意味ならば、社会主義を待たなくてもそれ自身の道がある。——つまり、月の下で抱き合っささやけばよいのだ。社会主義の自由恋愛論は、現代社会を打倒するために唱えられる。「政治家が議論している間に、飢え⁴²と恋は世界を支配する」。社会主義者は詩人の直覚を科学的根拠によって明確に保持し、今の上層階級が政府を作り、議会を作って日々議論をしている時、この「飢え」と「恋」という二つの鉄槌を振るい、社会の根底から組織を立て替えようとしているのである⁴³。生物が現実要求するものは食物であり、理想として要求するものは恋愛である。この厳粛な人生の要求——社会の維持と進化の要求が無視され、圧迫される社会は、たった一発の打撃で覆ってしまうようなぐらついた基礎で立っている社会である。この要求が社会の一部だけ満たされ、他の全ての分子が純粋な犠牲として存在する著しい例は、あのアリとハチの社会である（上層階級の学者は努めてアリ、ハチの社会を人類の社会になぞらえ、ハチに女王がいることを理由として無用になった故イギリス女王⁴⁴あるいは今のオランダ女王⁴⁵の存在を弁護し、アリは男だけが労働せずに存在することから、貴族らの素行の悪さに権利を付与する。ところが、生殖後無用となった女王バチを働きバチが集まってかみ殺すことになぞらえようものなら、それは「秩序を乱すもの」だと言う⁴⁶）。しかしながら、最も高等な生物である人類は、男女全てが理想を持ち、理想の実現を社会全分子の競争によって得たのである。ある理想が実現されると、さらに高い理想がすぐに現れる。人類は進化するに従って、つまり理想の実現を重ねるに従って理想

42 原文では「饒」となっている。「饒」は「豊か」という意味で、現在でも世界を支配できていないものである。著作集には「饑力」と指摘されている。後の文脈からしても、「飢える」という意味の「饑」をあてるべきである。よって「飢え」と訳した。

43 原文は「為めなり」と結んでいるが、主語からすると、この結びはおかしい。よって、文章を改めた。

44 「故イギリス女王」とはヴィクトリア女王のことである（ヴィクトリア女王は、一九〇一年に崩御した）。

45 当時のオランダ女王は、ヴィルヘルミナ（Wilhelmina Helena Maria van Oranje-Nassau）。一八九〇年から一九四八年まで在位した。

46 要するに、都合のよい部分しかなぞらえないところが、御用学者の浅はかなところだと言いたいのだろう。

を高くし、それに従い恋愛の要求を大胆華麗なものにする。在原業平⁴⁷を今日のドイツの宮廷に生まれさせよ。人類は大いに美を進化させ、カイゼル髭の醜い容貌は人類から淘汰されるだろう。恋に上下があるものか（我々はこの大胆な平等主義に立つ英雄の名を忘れたことを恥ずかしく思う）と言った女子をドイツ皇太子のそばに置いてみよ。美しく飾りたてたヒキガエルは雌雄競争の劣敗者となり、人類は大いに美を進化させることだろう。ああ「飢え」と「恋」！ 飢えた者にはどうしてひとかけらのパンさえもないのか。恋する者はどうして恋する男と女を奪われるのか。この解決が社会の全分子の手に答案として与えられた時——それは、つまり経済的貴族国が地響きのような音を立てて崩壊する時なのだ！ 話を戻そう。羊のようなかわいらしい家庭論者よ。恋女房⁴⁸と愛する子が一人だけのうちは、わずかな月給でも家庭の城壁にすることができよう。しかしながら、愛する子も二人になり、三人になると、城内に内応者が出るようになる。また、そのすがりついている資本家の冒険、会社の破産、あるいは解雇などによって夫のボロ靴⁴⁹と腰弁当が使えなくなった時、君の兵糧は何日支えることができようか。この小さな城壁を維持し、兵糧を蓄えるために、もともとの天性は羊のような⁵⁰主人も、狼のようになって世間と戦い、かつての希望に輝いていた活気は失せて、三十で老人のように衰え、薄ひげの下からは微笑があふれていたというのに、もはや石のように閉ざされた暗い唇があるばかりである。えび茶色の袴を着て花のようにニコニコと笑い、小鳥のようにさえずっていた少女は一瞬で消え去り、ふっくらとした頬⁵¹は生活の苦難のためにやせ落ちて二度と笑みを見せることはない。愛の光に満ちあふれた子供の小さな手は、母のやせた胸の骨をさらに削ろうとするものであるかのように乳房を探る。家庭論は悲惨の中から落ちた涙の笑みではないのか。家庭の窓を開き、激しい音を立てて押し寄せる海嘯⁵²がどこから流れて来るかを見よ。金井博士の『社会経済学』が社会主義をそしり、「私有財産制度の廃止は、道徳上並びに経済上の利益にとって不可欠な家庭の神聖を傷つけ、打破するに至るだろう」と言ったことなどは、実に人類に通じていない意志の表白と言う他ない。家庭論者よ、家庭の神聖は個人主義の革命によって論理上の事実となった。つまり、貴族階級だけが土地を所有し、一般階級に単なる小作権だけしかなかった時代と同じではない。また、男子だけが所有権の主体で、女子には独立を維持する何らの経済的基礎がなかった時代と同じでもない。今の時代においては、経済的幸福に取り囲まれた女子は、むしろ男子をもてあそぶ自由があるほどになった。私有財産制度に感謝すべきことは、それによって確立された民主主義と、この女子の解放である。恋愛の神聖とか、一夫一婦といったものを主張して家庭論を作る者にとっては、私有財産制の打破を叫ぶ社会主義が敵であるように見えるのは、一見するとその通

47 在原業平は平安初期の歌人。『伊勢物語』の主人公だとされ、美男子として名高い。

48 「恋女房」とは、恋い慕って結婚し、深く愛している妻のこと。

49 原文では「破靴」となっているが、本文のような意味に解してよいだろう。

50 原文では「羊の如き天稟」となっているが、〔ママ〕と注記してある。『北一輝思想集成』では、「天稟」ではないかと見ている。「天稟」とは、「天性」のこと。

51 ふっくらとした頬は、かつては美人の形容であった。

52 海嘯とは、満潮が河川をさかのぼる際に、激しく波立ちながら進行する現象のこと。

りであるかのようである。しかしながら見よ。家庭の維持、男女の独立に不可欠な私有財産は、かつての財産のように、経済的貴族階級だけのものである。小作人の農奴、裏通りの長屋に住む労働者はもちろん、かわいらしい家庭論者などはただ月末に与えられて、味噌屋に払うまでの私有財産ぐらいしか持っていないではないか。もし今日はあるが明日にはもうない月給、朝得ても夕方には消えてしまう賃金が私有財産制度であると言うのなら、一年間の期限を定めて平等な購買力として分配される社会主義の私有財産は、むしろ世襲財産の名前があつて当然となろう。家庭論を口にして、男子の楽しめる平和がある世は遠い将来のものである。武力時代において男子が最も戦闘の義務を負担していたように、来るべき大革命の前において最も戦闘に耐える男子が小天地でひっそりして、子供や女子が遊びほうけているようなことは、男女の分化的発達を忘れるものである。女子はこの残酷な矢叫び⁵³の達しない所に置き、月桂冠⁵⁴を作る任務に服させよ。革命戦争の中でその繊細な手を捕まえて、戦の中に勢いよく放り込むのは、落城の時を考えてのもので、社会主義は巴御前⁵⁵の出馬を仰いで戦うほど望みのないものではない。社会主義の自由恋愛論は、個人主義時代の女権問題とは自ずから無関係である。現在において家庭論を作り上げて、まさに社会の傍観者となっている者などは、羊のようなところは同情に値するが、単に経済的貴族らが大規模にやっている利己的行動を貧弱な状態で行おうとする消極的利己主義者にすぎない。世が軽蔑すべきなのは家庭論の流行である。

まさにこのようである。だから、自由恋愛論に伴う男女同権論とは、個人主義時代の男女同権論のように、男子である個人と女子である個人を比較し、精神上的の能力もしくは肉体的活動において同等な力があるというような事実を無視した独断に論拠を置くものではない（個人主義の独断を継承して、自ら社会主義者と称するものにこうした失態が多い）。社会の進化のために、最も生物進化に力がある雌雄競争を自由にするために男女に平等な選択権を与えよという意味で理解せよ。自由・平等論はどこまでも社会進化の利益の下に唱えられなければならない。女子は月経、妊娠、分娩、授乳という大きな犠牲のためにエネルギーを消耗することが甚だしい。そのため、男性的な特殊な者か、あるいは両性的な者か、もしくは老嬢^{オールド・ミス}（多くが後には女性としての特質を失うという）かでなければ、決して男子と精神的、肉体的競争において対等に立つことができないからである。個人主義の独断的平等論のように、思想上においてのみ思考できる原子的個人を仮定して、全ての個人と個人を比較することによって男女同権論の基礎とするのは、あたかも個人である大人と子供を比較して、精神的、肉体的能力において同じであると言うのと異ならない。社会主義は科学的基礎によって大人と子供が異なるように、分化的進化をしてきた男子と女子が断じて同じでないことを認める。しかしながら、科学的基礎によって社会の古い分子と新しい分子が行う自由な競争——つまり、前代の理想を実現してこれを維持しようとする

53 「矢叫び」とは、者に矢を射当てた時に、射手が声を上げること。つまり、戦場で聞こえる声のことである。

54 「月桂冠」とは、古代ギリシャにおいて、競技の優勝者にかぶらせて賞賛の意を表したもの。

55 巴御前は、木曾義仲に嫁いだ女性。武勇に優れた美女と名高い。木曾義仲が死ぬまで武將として追従したとされる。

現代の古い分子と現代の理想を実現して後代の進化に到達しようとする新しい分子の自由な競争に——によって社会の進化するのを認める。それと同じように、社会の男子の分子と女子の分子とが各自その理想（つまり、理想の大部分はその時代の社会の理想であり、さらに各々の個性によって特殊なものとなった理想）を継続された命である子孫において実現させようとし、その時代における社会の理想を最もよく体得した男女が雌雄競争の中心になることによってのみ社会は進化することができると主張するものである。つまり、男女同権論は恋愛方面における自由・平等論なのだ。そして全ての個人の自由・平等が経済的従属関係のない平等な平面上に立って初めて自由となる。それと同じく、男女の恋愛の自由・平等論は、女子が私有財産権の主体となれず、男子に経済的に従属していた時代及び経済活動の能力において男子に劣るために事実上完全に経済的な従属関係にある現代——いや、現代のように財産の多くを有する女子にむしろ経済的な従属関係にある男子の多いような社会進化の過程においては遠い理想にすぎない（この点においても、経済上の独立は全てに通じる独立である。だから、あの土地の略奪によって経済上に独立していた貴族らが君主に対する忠順の義務を拒絶して、全てにおいて独立を得た。それと同じように、元禄時代の長い平和のために、一般階級が経済的基礎を作るとともに、さらに貴族らに対して忠順の義務を拒絶して、維新革命による民主主義を立てた。そしてまたそれと同じように、今の女学生の墮落と称されるものは、経済的独立によって男子に対して奴隸的服従（つまり、かつての男子においては「二君に仕えず」という忠順の義務、女性においては「両夫に見えず」⁵⁶という貞順の義務）を拒絶して、自由・平等という明るい兆しを得た証拠なのである。そしてかつての貴族が君主から「乱臣賊子」⁵⁷と言われたように、維新革命の民主主義者がまた貴族から同じく「乱臣賊子」と称された。それと同じく、女子が男子の好き勝手な恋愛と同等の恋愛を好き勝手に行うようになったのを見て、男子階級から「墮落だ」と言われるのは、あたかも社会進化の跡である歴史が進化の当然として平等観を発展、拡張させるのをむしろ「世も末になったのだ」と嘆くのと同じ野蛮人の振る舞いである。墮落せよ。男子が墮落している間はどこまでも平等に平行線をなして墮落せよ。女学生の墮落というのは、実は進化であって、まさに讚美すべきことなのだ。さあ、讚美しよう）。

以上から、社会主義時代における個人単位の生存競争は、あらゆるものの進化の大権を社会の全分子の手に置き、理想を実現させる唯一の道である雌雄競争が自由・平等に行われることを言うのだ。

56 「見える」とは、妻が夫に仕えることを指す。

57 「乱臣賊子」とは、国を乱す臣と親に背く子のこと。